

お正月の御馳走

松原至大

ふた子のジェリーちゃんとジーンちゃんは、駅に着くのが待ちきれませんでした。お母さまに連れられて、お祖父さまとお祖母さまがいらつしやる田舎の農場へ行くとお正月をすごいつしよにむかえるために。

「もつと早く、汽車が走つてくれればいいなあ」とジェリーちゃんがいいました。

「ほんとだわ」ジーンちゃんもこういいながら、お母さまの方へむいて、

「おじいちゃまが、おむかえにいらつしやるかしら」とお聞きしました。

「おじいちゃまもフランクおじちゃまも、いらつしてますよ」

「もうじきかしら」ジェリーちゃんがたずねました。

お母さまは、時計をごらんになつて、

「ええ、もうすぐ。今に村のあかりが見えますよ」とおつしやいました。

ジェリーちゃんとジーンちゃんは、汽車の窓の方に、顔をむけました。

もう木や家が、かけ出しているのは見えません。外は暗くなつていましたから。そのうちに、遠くの方であかりがちらちらしました。

「あら、村のあかりが」と、ジエリーが大きな声をあげました。

「そうですね。あなた方、お支度をなさつて」と、お母さまがにこにこなさつておつしやいました。

ふたりは、コートを着て、帽子をかぶつて、手袋とオーヴァ・シューズをつけました。その間に汽車がとまりかけたので、

「私、小さい方のスーツケースを持つてよ」と、ジエリーちゃんがいきました。

「私はカメラとお人形」と、ジーンちゃんがいきました。

駅には、お祖父さまとフランクおじさまが、おむかいにきていました。おふたりは、

「おめでとう。雪が深いので、馬車はだめだから、馬とそりがきていますよ」こうおつしやつて、ジエリーちゃんとジーンちゃんを、おだきになりました。

ジエリーちゃんとジーンちゃんは、フランクおじさまといつしよに、そりの前の席にのりました。お母さまと祖父さまは、うしろの席にのりました。フランクおじさまは、ふたりが、暖かいように、毛布をかけました。

ボク、ボク、ボク、かたい雪の上を、馬の足が進みます。月と星が、雪の道を照らしていました。

間もなくお祖父さまのお家に着きました。そりが玄關のところに来ると、ドアがあきました。

「おめでとう。待つていましたよ。ごちそうを作つて」と、お祖母さまはうれしそうでした。

ジエリーちゃんとジーンちゃんはすぐにお祖母さまにとびつきました。

「おばあちやま、私たち、汽車でお弁当食べてきたのよ。けどミルクを一ぱいちょうだい」

こういつて、ふたりはおいしいミルクを頂きました。まだ起きていたいと思いましたが、目がいうことをきかなくなりまして。

「もうおやすみの時間ですよ」と、お母さまがおつしやいました。

「おばあちやま、あした、おばあちやまが起きたら、おこしてちょうだい。私、馬と牛に飼葉をあげるお手伝いをします」と、

ジエリーちゃんがいきました。

「私もおこしてちょうだい」と、ジーンちゃんがいきました。するとお祖母さまは、

「おばあちやまは、とても早いんですよ。お日さまのおでにならないうちに起きますよ。あなた方は、もつとやすんでいる方がいいんじゃないの」とおつしやいました。

「いやよ。いつしよにおこして」ふたりはゆずりません。

「はい、はい、おこしますよ」とうとうお祖母さまは、約束をなさいました。

あくる朝、お声がかかると、ジーンちゃんとジェリーちゃんは、とび起きて、服を着ました。

「しつかりと支度なさい。ずいぶん寒いから」お祖父さまが注意なさいました。

ジーンちゃんとジェリーちゃんは雪の支度をしました。それからジーンちゃんはランタンをさげて、ジェリーちゃんは両手でミルクを入れる大きな罐をかかえました。

ザク、ザク、ザク、ふたりの足は、雪の道を歩きました。

お祖父さまが、納屋の戸をあけて下さいました。フランクおじさまは、飼葉桶に乾草をいっぱい入れていました。

お祖父さまは、納屋の奥の野菜部屋におはいりになつて、こうおつしやいました。

「牛にやるビートを持つてこなければ。それがベスとレディーのお正月の御馳走」

ビートというのは、根をたべる野菜の一つで牛が大好きなものです。

「おぢいちゃま、馬にもお正月の御馳走をあげますか」と、ジーンちゃんがたずねました。

「馬のには、おぢいちゃまのコートポケットに、お砂糖のかたまりがあるんだよ」と、お祖父さまが答えました。

「あのね、いいお話を教えてあげようか。おぢいちゃまはね、牛や馬にまず御馳走をなげて、この年をよくするんですつて。それから今年は、毎日なにか御馳走をやるんですよ」これは、おじさまの言葉でした。

「おぢいちゃま、ほんとなの。どうして」ジーンちゃんが聞きました。

「そうだよ」といつて、お祖父さまはしずかにお話して下さいました。

「牛や馬には、特別やさしくしてやるのが、喜ばせることのただ一つの方法なのだよ。馬のドビンとプリンスは、いつも元氣

で勿ごうと思つて待ちかまえている。牛のベスとレディーは、ミルクをくれることを忘れやしない。いつでもミルクを用意してくれるからね」

「でも、どうして毎日御馳走をあげるの」

「おじいちやまは、今年はいつでもお正月のように、楽しい日にしてやりたい。おじいちやまが、あれたちに感謝しているということを、よく知らせてやりたいんだよ」

「きつと牛にも馬にも、わかるわねえ。牛たちは、おじいちやまが、そばによつて行くと、いつでもうれしそうに『モー』となくのね。馬たちは、おじいちやまに鼻をこすりつけるわ。みんななにか知つていることを、おじいちやまにお話しようとしているんだわ」ジエリーちゃんがいきました。するとお祖父さまに、ここにこなさつて、

「そうだねえ」とおつしやいました。

(ゴールドイ・グラント・テイルル女史の作による)

おしらせ

昭和二十七年六月廿八日から七月卅一日まで、お茶の水大学主催にて開催いたしました幼稚園教員免許法認定講習会の倫理・体育原理・児童心理・保育課程の四単位の単位証明書が出来ますから、お序での折、取りにおいて下さいませ。お待ち致しております。

お茶の水女子大学附属幼稚園内

講習会係り

(37頁より)

(4) スリツバ (5) 時計
(6) 立木 又一人は、

1 コーヒー茶碗 2 ケーキ 3 ナシ

4 おさだ 5 チューリップ 6 イス

などかきこんだ。絵をかき終つてから、縦横の線に折目をつけ、実線の部分だけ切り、絵のある部分が出る様に四角に作つて、糊ではりつける。自分たちで作つたえすころくで自分達で作つたえすころくをこころがせて、遊んでいる幼児達の様子を嬉しそうに眺められるものは、幼児の製作を実際に指導するものが味わえる妙味というものであろう。